



T O K Y O R O P P O N G I R O T A R Y C L U B

東京六本木ロータリークラブ



『エンジョイ ローター』

～Enjoy Rotary～

東京六本木ロータリークラブ会長

W E E K L Y R E P O R T

『夢をかたちに』

～ Make Dreams Real～
国際ロータリークラブ会長

発行日 2008年12月1日

No. 16



平成20年11月10日

卓話 『源氏物語研究の課題』

米山奨学生

柳 周希 様



皆様、こんにちは。柳周希です。本日は、いままで日本の古典『源氏物語』を勉強しながら、日本人の学生なら当たり前のように入れたかも知れないけれど、外国人である私にとっては、理解しにくかったこと、だからこそ、みえてくる『源氏物語』の魅力について、お話させていただきたいと思います。



まず、一つは、「色好み」です。最初、私はこの「色好み」という感覚がとても理解しづらかったのです。韓国語訳『源氏物語』では「色好み」を好色と訳しています。しかし、韓国語の好色は、『源氏物語』の「色好み」と意味が違います。むしろ、江戸時代の『好色一代男』で語っている「好色」の意味に近いです。当時、光源氏に対する私の認識も韓国語訳の影響で、光源氏をただの「色男」として受け入れていました。

ある特定の言葉がないことは、その言葉の表している現象がその文化には存在していない場合もありますが、もともとはあったのにいつの間にか途絶えてしまった可能性も考えられます。この「色好み」の場合、韓国内での認識は後者であると思います。その根拠は、平安時代とほぼ同じ時期の韓国の文学作品を読んでみると、自由恋愛の時代であったことがわかるからです。しかし、徐々に儒教や仏教の影響を受け、若い男女の恋に関しては、厳しくしりぞけられる傾向があらわれます。このような事情がありまして、私は『源氏物語』の「色好み」という美意識が、なかなかわかりにくかったのです。

もう一つ、『源氏物語』の中、理解しにくかったことは、香りです。『源氏物語』の言葉の中に、香りに関連する表現が数え切れないほど多いことに気づきます。さらにその意味も、「よい香りがする」、あるいは「つややかに美しく見える」など多様です。もちろん、韓国の古典文学にも自然の香りを詠った歌などがありますが、日本に比べて少ない方です。昔の日本人は、香りに関して繊細な感覚を持っていたと思います。

私にとって『源氏物語』の魅力は何か。それはわからないところが多いことです。物語と向かい合っていれば、限りなく疑問が生じてきます。それが私にとって『源氏物語』の魅力であり、勉強をしつづける理由でもあります。

ご清聴、ありがとうございました。